【研究論文】

道で結ばれる空間

―三野町太刀野山の伝説から

磯本宏紀

一　はじめに

伝説について記述するとき、その登場人物や動物、場所、その土地での事件の内容、現在その土地に建てられる石造物への解釈について記述されるのが普通であろう。また、教育委員会や地元の同好会などによって、伝説に関係ある場所に案内板が立てられることもある。そのように記述される伝説は観光利用され、関係する場所はきれいに整地され、地元の名所として売り込まれることが多い。そうした活動は、伝承の一つとしての伝説を記録し、広く伝えようとする目的からであり、伝説は確固としたものとなり、形をもった状態として成立することになる。

ここで少し伝説について整理しておく。まず「伝説」という言葉は、柳田國男によると「四十年ほど以前、高木敏雄氏とその友人たちが、しきりにこの問題を論じた際に、始めて独逸語でザアゲ、仏蘭西語でレジャンドという語とほぼ近い意味に、この『伝説』の文字を用い、それがまたたちまちに全国の口言葉にもなったのである。」[柳田　一九九〇　一一]という用語の起源説明がある。柳田の定義は、「第一には伝説はこれを信ずる」[柳田　一九九〇　三五]「伝説の中心には必ず記念物がある」[柳田　一九九〇　三六]「人に解き明かすのに定まった形がない」[柳田　一九九〇　三六～三七]という三点の指標を提示する。伝説を捉えるにあたって、この指標は、現在もある程度有効であると考えられるものである(1)。

伝説の記述は、市町村史や県史など誌史でも記述されることが多い。また、近世の地誌に伝説が登場してくることもある(2)。伝説に関する市町村史での記述方法は、大方こうした記述方法がとられている(3)。もはや、伝承としての伝説からは離れ、一つの固定した物語として描いている観さえある。「順序を立てまた年代や人の名を精確にしようとは努めるが、ただかくかくの事実があったと言い伝えるというまでで止めているから、記述は簡明を極めて、これをもてはやす人々の感動は伝えない。」[柳田　一九九〇　二〇]ともされる。先述の柳田の定義によるなら、第一の「伝説はこ

れを信ずる」人がおらず、第三の「人に解き明かすのに定まった形がない」という点は無視された伝説の記述ということになる。

もちろん、こうした記述には利点もある。それは、伝説中のモチーフを抽出することによって比較研究の可能性が得られるし、また類型論も可能であろう。こうした研究や記述方法を否定するべきものではないし、それ自体、十分に有効な方法であると考える。

ただ、そうした記述法は、その伝説が一つのムラで必ず一つの形態で存在しているというのが前提である。あるいは、一つの場所への認識が同じものであるというのが、やはり前提である。そのため、最低限、一つのムラでは伝説という歴史情報が共有されることが必要であり、また、伝説は共通の土壌の元で維持され、共通認識、共同幻想の中で変化していくことになるだろう。そうした前提が成立するのなら、伝説はムラで共有され、その中での共通認識として記述されるのも十分に肯ける。しかし、市町村史等でも一地域一伝説の枠をもって記述され、資料化、再生産された結果としての伝説は、同一の枠組みの中で処理されているものであり、固定的なものである。すでにこうしたところでは、実態としての伝説とは異なるものとなっていて、柳田のいう「人々の感動」[柳田　一九九〇　二〇]は読み取りにくいようにも思われる。

個人個人の解釈や記述によって変化し続ける伝説の、その行き着く運命について文字化を取り上げ、「この作業は異話のうちのただひとつの採録であったり、編者による新たな『編集』であったりして」[梅野　二〇〇〇　二二三]という興味深い指摘がある。もちろん、個々の認識差を明らかにしておく必要はあろう。しかし、それが「編集(4)」されたものであるにしても、現在一つの共通認識、共通の解釈として存在しているのもまた確かである。また、当然ある一定の空間に結びつけた語りであるため、語り手の空間認識も反映される。

本稿では以上を踏まえ、伝説それ自体を支える集団があるという前提の元で(5)、伝説を共有する集団における共通認識、ムラを越えた空間認識を検証することに重点をおく。それはムラの領域とは異なる範囲での空間認識であり、特定の場所に関連する空間認識でもある。確かに、従来の市町村史や多くの民俗誌に利用される指標では、枠組みはしばしばムラ(6)であると予想されるのであろう。だが、伝説が広域に展開することもあり、その中では、伝説支持集団が別に存在することもある。情報の共有関係が変化することもある。香川県との県境にも近く、強い交易関係をもった山村、三野町太刀野山における蛇伝説を事例として取り上げる。

二　三野町太刀野山における蛇伝説

全国的にも比較的広く分布する伝説の中に、蛇伝説がある。徳島県においても、蛇伝説はその事例を多く確認することができる。すでに市町村史等で調査され、報告されている事例だけでも七五の伝説が確認できる。いずれも、池や淵、滝などの水辺と、大木、大岩を伝説の場所とするものであり、少なくとも、これを柳田のいうところの「記念物(7)」と見ることができる。

この中で、本稿では三野町太刀野山における事例について検討する。当地域は山間地であり、また『三野町誌』(8)においても、水辺での伝説が掲載され、各地区における伝説の形態から、相関性を見出すことが可能であると予想されるためである。

まず、『三野町誌』に掲載されている伝説、三つの事例を引用する。

事例A　滝渕の竜(9)

竜頭の一の滝の、底知れぬ深い竜渕に、竜がすんでいた。重清墨に住んでいた大牛が、戦いをいどんできた。この勝負に竜は負けてしまった。くやしがった竜は、太刀野山の八枚屏風の淵の、竜親分に助けを求め、大牛を負かして、再び強者を誇った。

表１　三野町太刀野山を中心とした水辺の伝説

事例番号	居住地区または場所	対象者 生年	対象者 性別	対象者 生誕地	事例内容	備考
A	龍渕の滝				竜頭の一の滝の、底知れぬ深い竜渕に、竜がすんでいた。重清墨に住んでいた大牛が、戦いをいどんできた。この勝負に竜は負けてしまった。くやしがった竜は、太刀野山の八枚屏風の淵の、竜親分に助けを求め、大牛を負かして、再び強者を誇った。	三野町誌
B	池尻				八枚なべらの上の方に池尻という地名がある。この地は大きな池の尻にあたるところで、この水は三村（加茂野宮・勢力・芝生）の灌漑用水であったと伝えられている。現在は殆どその面影はないが、その近くにお地蔵さんがあって、池への飛込み自殺者が絶えず、このため祀ってあるともいわれている。年代は不詳であるが、出水のため付近の谷沿いの田畑が流出したらしい。池の修理も毎年のようにされ、付近に売物の露天がたつ程の盛況であったとも伝えられている。	三野町誌
C	八枚なべら				松尾橋より約二丁、河内谷の合流点から遡ること約五キロメートルの所に「八枚なべら」と呼ばれる奇岩がある。（中略）この岩の上手には、もとこの岩にせきとめられて三反歩ばかりの広さの「ふち」があった。（中略）伝説によると、昔、元の「ふち」には雌雄二匹大蛇がすみ、讃岐の満濃池との間を通っていたとも、また加茂野宮滝寺の北三丁にある名勝竜頭の滝と、竜のある雨乞山の頂上との間を往来していたとも伝えられているが、この大水 からどこへ行ったか姿を消したという。土釜に祠があり、竜王大権現として今も大蛇を祀っている。	三野町誌
D	八枚なべら				河内谷の激流に長年もまれ続けた巨大な岩石が、座敷状で表面が滑らかな一枚岩に仕上がった。その広さ二十畳くらいの厚いなべら石が八枚並んだ奇観は珍しい存在である。この岩が谷水をさえぎり、水がよどみ淵を形作ったがいつしか雌雄二匹の大蛇が住み着くようになり、満濃池や龍頭の滝、雨乞山の頂上付近まで徘徊するのでお山の守り神、龍神さんの化身と崇められた。この岩が谷水をさえぎり、水がよどみ淵を形作ったがいつしか雌雄二匹の大蛇が住み着くようになり、満濃池や龍頭の滝、雨乞山の頂上付近まで徘徊するのでお山の守り神、龍神さんの化身と崇められた。	「八枚なべら」につくし会により立てられた案内板に書かれる。
1	井ノ久保	昭和２年	男性	井ノ久保	昭和３０年代のことだと記憶しているが、普段は見かけないような色白で、きれいに着飾った若い女性が通ったのを見たという人がいるので、井ノ久保中で話題になった。下の中屋方面から金毘羅街道を登ってきたのだという。誰からともなく、そのような話が出て、ムラ総出でその女性を捜した。その女性は、ムラを通過するときには金毘羅街道を通過したが、ムラを離れると草むらの中に姿を消していった。見た人の話では、その女性の通った跡、草はなぎ倒され、枯れ果てて、そこには蛆がわいていた。その女性は塩入の釜ヶ淵へと向かったようだった。	
2	中屋	昭和８年	男性	中屋	戦前のことだが、大平の方には両頭の蛇がいた。八枚なべらとの関係はわからない。	
3	中屋	昭和２年	女性	三加茂町	昼間畑に出て野良仕事をしていたところ、見知らぬ若い色白の女性が側を通りかかった。その女性は軽く会釈をしてそのまま通り過ぎ、中屋から山を下って八枚なべらの方へと向かって下りていった。それから何日かして、若い女性が八枚なべらで身を投げて死んでいた。	
4	中屋	昭和２年	女性	三加茂町	若い女性が、金毘羅街道を通って讃岐の満濃池と八枚なべらとの間を通っていた。また、あるときには竜が八枚なべらから現れて、満濃池の方へと向かって飛んでいった。八枚なべら近辺に土地をもつが、昭和２２年に中屋に嫁いできたが、それ以来今まで、何が出るかもわからず不気味なので、また、石が滑りやすく危険なので、一人でそこへは行きたくない。行くときは必ず人と行くようにしている。	
5	井ノ久保	昭和２年	男性	井ノ久保	雨乞をした後、雨が降った。その時、八枚なべらの滝の上には小さな白蛇がちょろちょろと現れた。それを滝の下で見つけた人が、「お前の姿はそんなもんじゃないだろ！」と言ったら、どっと水柱が立ったので、慌てて後も振り向かずに逃げ出した。	話し手は、解釈として降雨による鉄砲水であるということを加える。
6	中屋	大正14年	男性	中屋	野良仕事をしていたところ、そこをきれいに着飾った若い女性が讃岐方面に向かって通りかかった。何も言わずに通り過ぎていくのだが、ムラを外れるとその姿はすぐに消えて見えなくなってしまった。同じ金毘羅街道を反対から戻ってきた人がその女性を見なかったという。	
7	塩入	昭和２年	男性	塩入	塩入地区のはずれ、山手の方には釜ヶ淵という淵があって、そこには竜だか蛇だかが棲む。カネを嫌い、鍋をその釜ヶ淵に投げ込んだら怒って夕立を降らせ、洪水にした。釜ヶ淵には水神が祀られ、祭りも行われるが、塩入では祭りの際には鉦を使わない。	

事例B　池尻(10)

八枚なべらの上の方に池尻という地名がある。この地は大きな池の尻にあたるところで、この水は三村（加茂野宮・勢力・芝生）の灌漑用水であったと伝えられている。現在は殆どその面影はないが、その近くにお地蔵さんがあって、池への飛込み自殺者が絶えず、このため祀ってあるともいわれている。年代は不詳であるが、出水のため付近の谷沿いの田畑が流出したらしい。池の修理も毎年のようにされ、付近に売物の露天がたつ程の盛況であったとも伝えられている。

事例C　八枚なべら(11)

松尾橋より約二丁、河内谷の合流点から遡ること約五キロメートルの所に「八枚なべら」と呼ばれる奇岩がある。（中略）(12)

この岩の上手には、もとこの岩にせきとめられて三反歩ばかりの広さの「ふち」があった。（中略）(13)

伝説によると、昔、元の「ふち」には雌雄二匹大蛇がすみ、讃岐の満濃池との間を通っていたとも、また加茂野宮滝寺の北三丁にある名勝竜頭の滝と、竜のある雨乞山の頂上との間を往来していたとも伝えられているが、この大水(14)からどこへ行ったか姿を消したという。土釜に祠があり、竜王大権現として今も大蛇を祀っている。

以上『三野町誌』に掲載される三つの事例である。いずれの事例においても、伝説を語っている主体が明確にされていない。ただ、事例Aでは淵に、事例Bでは池の尻にあたるところが、そして、事例Cでは八枚なべらとその元の「ふち」が、その伝説の対象として語られている場所である。

ここでもう一つ、文字化された伝説について、八枚なべら付近に立てられた案内板(15)にも記されている。当然、事例Cと同じ「八枚なべら」を「記念物」にする伝説である。その伝説を挙げておこう。

事例D　八枚なべら

河内谷の激流に長年もまれ続けた巨大な岩石が、座敷状で表面が滑らかな一枚岩に仕上がった。その広さ二〇畳くらいの厚いなべら石が八枚並んだ奇観は珍しい存在である。

この岩が谷水をさえぎり、水がよどみ淵を形作ったがいつしか雌雄二匹の大蛇が住み着くようになり、満濃池や龍頭の滝、雨乞山の頂上付近まで徘徊するのでお山の守り神、龍神さんの化身と崇められた。

この事例Dは、同じ「八枚なべら」という場所を扱ったものとして記述された伝説である。事例Cと事例Dの大蛇の登場する伝説を比較した場合、すぐにわかるのは、事例Dには「お山の守り神」という異なる要素が入ってくることになる。梅野のいう「編集(16)」の結果なのであろう。

事例それぞれに、相関関係をみることができる。まず事例Aの竜は大牛に敗れた後、事例Cの八枚なべらの竜親分に助けを求めに出向いた。一方で、事例Cの八枚なべらの竜は「竜頭の滝と、竜のある雨乞山の頂上との間を往来していた」となり、事例Aと事例Cの場合、竜を中心に据えるなら、竜頭の滝の「竜」と、八枚なべらの「元の『ふち』」にいる「大蛇」は、お互いに往来していることになる。ちなみに、事例Aからは、八枚なべらの「大蛇」は、竜頭の「竜」よりも助けを求められるという点では、優位に立っている。

事例Aと事例Bの間には、とくに関係性を見いだすことはできないが、

事例Bと事例Cにおいては地理的に八枚なべらと同じ水系にあり、事例二で登場する「池尻」の上流が、事例Cにおける「元の『ふち』」(17)である。池尻には伝説として記述される蛇あるいは竜がいるわけではないが、同じ水系でもあり、後で出てくる事例三にも関係するため、ここで記しておく。

さて、三つの事例の相関関係は、一体何を示すものであろうか。もちろん、そのまま地域における交流・交易史や移住史、修験者の媒介等に結びつけるのはあまりに短絡的であり、十分な根拠もない。まず、問題にしなければならないのは、個々の語り手にとっての伝説と、文字化された伝説はどのような関係をもつのか、そして、その背後にあるムラの姿であり、空間認識が、現在に直接結びつくムラの歴史であり、見ていく必要がある。

しかし、この『三野町誌』でのまとまった形での伝説表記だけでは、ムラによる伝説の違い、個人的な伝説に対する認識の違い、さらには空間認識の差異においても、実態に即しているとは言い難い。

三　語られる伝説

語られている伝説は、記述される伝説とは異なる。一方で現在、伝説の語り手は、たとえば地元自治体出版の『三野町誌』、地方紙の『徳島新聞』、地元郷土史家による私家版など、必ずと言ってもよい程、文章化されたものを眼にしている。現に、聞き取り調査を行っている際にも、伝説の語り主から「『三野町誌』を見れば『全部』わかる」などと助言を受けるのである。つまり、現在伝説の語り手の多くは、何らかの形で文章化された伝説を読み、それを自らの語りに取り入れ、伝え聞いた記憶を確かにしている。この点に関しても、「郷土誌その他の書が新たにこれを筆録する場合にも、順序を立てまた年代や人の名を精確にしようとは努めるが、ただかくかくの事実があったと言い伝えるというまでで止めているから、記述は簡明を極めて、これをもてはやす人々の感動は伝えない。」[柳田　一九九〇　二〇]つまり、一つの伝説を記述し、固定化することは、実際にその地で語られ、聞き知るための伝説とは異なる姿になるということであろう。

さらに柳田は、「つまりは土地ごとの伝説の管理が、すなおな何も知らない故老の手から、少し歴史を知り、少し推理をする人の手へ移ったのであります。」[柳田　一九九〇　五九七]として、これを一九五〇年の段階で指摘している。まさに、現在聞くことの出来る伝説とは、そうしたものだと捉える必要があろう。

これらを踏まえて、事例A～Cを現時点での聞き取り調査によるところから検討したい。なお、ここに示した事例についても伝説が創造され、「編集」されたものであり、その数も無限に存在しうる。したがって、ここに挙げた事例がすべてのものでないことは断っておく。また、聞き取り調査の際には、「八枚なべら」について教えてください、といった形式の質問をし、その話の中で伝説と判断できたもの(18)を事例とした。したがって、先に挙げた指標によるなら、以下の事例は、「八枚なべら」を「記念物」とする伝説ということになる。なお、八枚なべらに関する伝説の詳細を聞いたことがあるという人は、金毘羅街道(19)の通る、井ノ久保地区、中屋地区の二地区のみにいらっしゃり、そのほかの太刀野山でも土釜、馬瓶、大平では聞いたことがないとか、伝説があることは知っているが、内容は知らないという方ばかりで、伝説の詳細について話す人はいなかった。

事例一　井ノ久保地区・昭和二年生まれ・男性

昭和三〇年代のことだと記憶されるが、普段は見かけないような色白で、

きれいに着飾った若い女性が通ったのを見たという人がいるので、井ノ久保中で話題になった。下の中屋方面から金毘羅街道を登ってきたのだという。誰からともなく、そのような話が出て、ムラ総出でその女性を捜した。その女性は、ムラを通過するときには金毘羅街道を通過したが、ムラを離

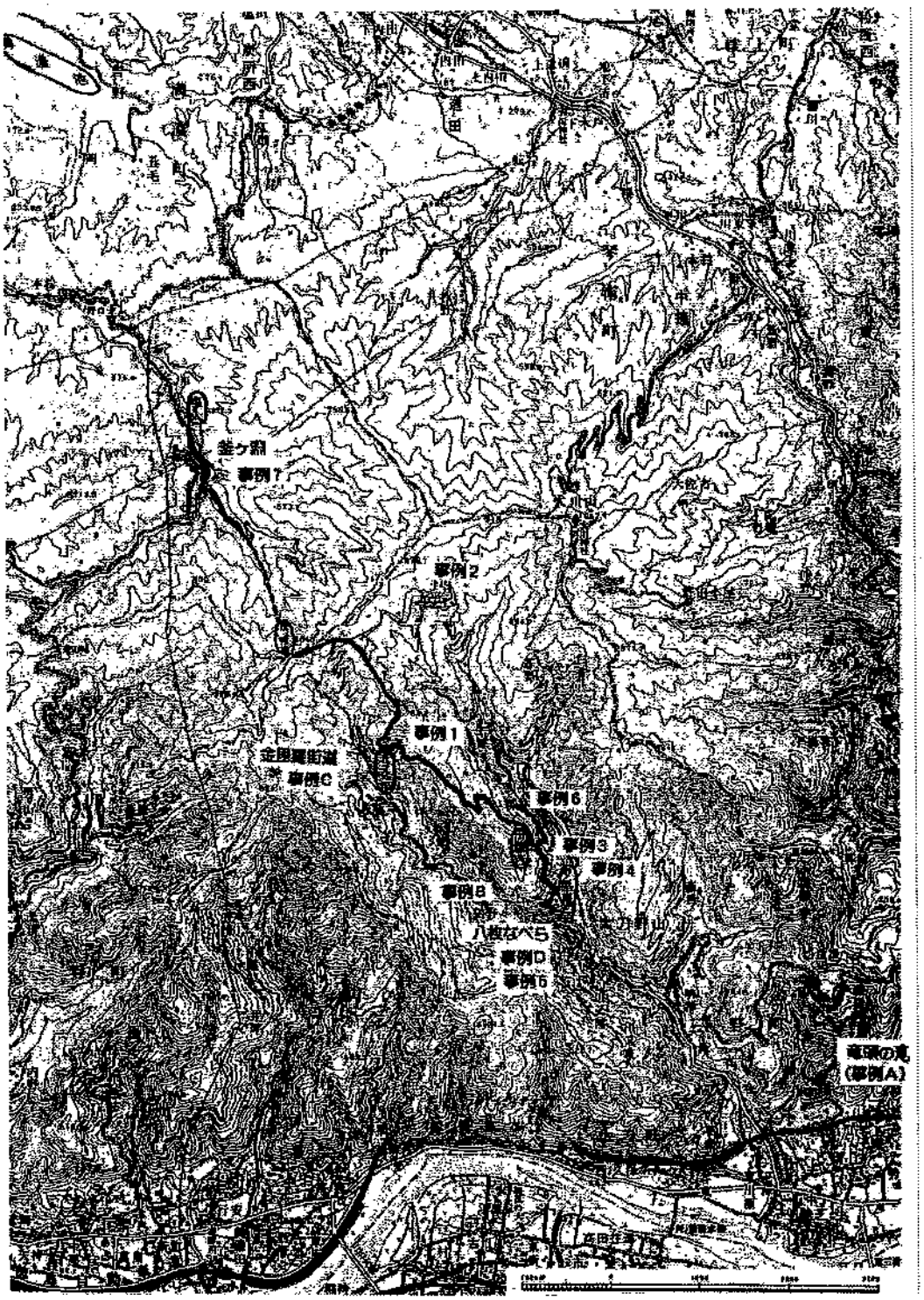

図１　金毘羅街道と伝説

（国土地理院発行５万分の１地形図『池田』より作成）

れると草むらの中に姿を消していった。見た人の話では、その女性の通った跡、草はなぎ倒され、枯れ果てて、そこには蛆がわいていた。その女性は、塩入の釜ヶ淵に向かったようである。

事例二　中屋地区・昭和八年生まれ・男性

戦前のことだが、大平の方には両頭の蛇がいた。八枚なべらと関係あるのかわからない。

事例三　中屋地区・昭和二年生まれ・女性

昼間畑に出て野良仕事をしていたところ、見知らぬ若い色白の女性が側を通りかかった。その女性は軽く会釈をしてそのまま通り過ぎ、中屋から山を下って八枚なべらの方へと向かって下りていった。それから何日かして、若い女性が八枚なべらで身投げして死んでいるのが見つかった。その女性は、数日前に通りかかった女性ではないかと噂になった。

事例四　中屋地区・昭和二年生まれ・女性

若い女性が、金毘羅街道を通って讃岐の満濃池と八枚なべらとの間を通っていた。また、あるときには竜が八枚なべらから現れて、満濃池の方へと向かって飛んでいった。八枚なべら近辺に土地をもつが、昭和二二年に中屋に嫁いできて以来今まで、何が出るかもわからず不気味なので、また、石が滑りやすく危険なので、一人でそこへは行きたくない。行くときは必ず人と行くようにしている。

事例五　井ノ久保地区・昭和二年生まれ・男性

雨乞をした後、雨が降った。その時、八枚なべらの滝の上には小さな白蛇がちょろちょろと現れた。それを滝の下で見つけた人が、「お前の姿はそんなもんじゃないだろ！」と言ったら、どっと水柱が立ったので、慌てて後も振り向かずに逃げ出した。

事例六　中屋地区・大正一四年生まれ・男性

野良仕事をしていたところ、そこをきれいに着飾った若い女性が讃岐方面に向かって通りかかった。何も言わずに通り過ぎていくのだが、ムラを外れるとその姿はすぐに消えて見えなくなってしまった。同じ金毘羅街道を反対から戻ってきた人がその女性を見なかったという。

まず、すでに周知のことではあるが、一つとして全く同じ伝説は出てこない。たとえば、伝説中の女性の行き先が塩入であったり、満濃池であったり、あるいは、八枚なべらに向かったり。そして、一人の方が複数の話をもち、行き先も複数出される場合もある。

ここで、各事例の共通点についてあげてみる。登場するのが、若い女性もしくは竜、白蛇であり、行き来する方向はともかく、八枚なべらが起点、あるいは終着点になっている。さらに、事例一・三・四・五・六が、何者かがムラを通過したという点で共通する。そして、その根拠にこれを見た人がいることが挙げられ、語られている。そのほか、事例四では、八枚なべらで女性が身を投げて死んでいるし、また事例三では「八枚なべら」の方に行くとか、事例一にしても「八枚なべら」の方向から女性がやってきたことが前提となっている。

「八枚なべら」に関する伝説を聞くことが出来るのが、中屋、井ノ久保に限定され、同じ大字太刀野山でも大平、馬瓶、土釜では「八枚なべら」については知っている人もいるが、伝説を詳細に語ることがない。また、

事例Aでの竜頭の滝との関係性は、ここでは出てこない。この点に着目したい[20]。中屋、井ノ久保と、他の三地区との違いはどこにあるのだろうか。

ここで、一つの道が浮かび上がってくる。伝説の中で登場する女性、あるいは竜はすべて讃岐へ向かう道を通る。そして、部落内を通過していく。この道は、三野町方面から讃岐方面へ向かう金毘羅街道とよばれる道の一つであり、現在では自動車で峠を越えて讃岐まで通行することができないため、幹線道路として使われることはない。しかし、自動車運搬が普及する以前、昭和三〇年頃までは讃岐に通り抜けるための幹線道路だった。当時、煙草の出荷が三野町芝生であるほかは、出荷、買い物等は芝生か塩入のどちらかに出向いていた。中屋、井ノ久保方面からも、樫ノ休場という峠を越えて木炭、借耕牛、竹材等を運搬し、現在の香川県仲南町塩入へと出荷していた。塩入は当時、馬喰が集まる借耕牛の集散地であり、また、木炭等の卸商も集まる一大拠点だった。現在三五戸と減少しているが、たとえば昭和二〇年代から三〇年代にかけては、六〇戸の家があった。さらに、塩入を抜けて琴平へも一日で行くことのできる距離だった。実際、事例として採用した伝説の話し手は、いずれも生活経験の中で樫ノ休場を越えて歩いた経験があり、現在使用されないルートを知っていた。その体験が少なからず語りに影響を与えているのもまた、確かであろう。実際、昭和三〇年代以降に生まれた人からは、類似の伝説を聞くことが出来なかったのだから。

さらには、事例一・三・四の中で女性、蛇、竜などが移動する。その移動は、「八枚なべら」を起点としての金毘羅街道沿いであり、塩入の釜ヶ淵や満濃池と結ぶ。しかし、事例C・Dで登場してくる竜頭の滝、竜王山は現れない。竜頭の滝や竜王山と、「八枚なべら」の伝説におけるつながりは聞くことが出来なかった。また、その背景には、竜頭の滝の大字加茂宮滝ノ奥と、太刀野山井ノ久保、中屋との日常生活での交流は、少なかったことがあげられる。現に、大正一四年生まれの滝ノ奥の男性は、「八枚なべら」とその伝説を始めて知ったのが、昭和四〇年代に中屋の人に案内された時だという。

そうならば、どのように伝え聞いたか、というよりも伝説を「編集」する話し手の生活経験を加味する必要がでてくる。そのことによって、情報としての伝説変化、またその情報の本質に近づくことが出来るのではないだろうか。

四　伝説によって結ばれた空間と金毘羅街道

『三野町誌』に掲載された伝説の事例Cや、「八枚なべら」の案内板、事例Dだけでも、伝説における空間展開は明白である。すなわち、三野町側から阿讃の峠を越える交流関係を裏付けている。しかし、これが何を示すのか、どう解釈できるのかについては明確ではない。それぞれの話し手が語る伝説から、空間認識については、ほぼ一貫してムラに留まるものではないことが確認できた。

その一方で、もはや常識的なことではあるが、「ムラを構成していた人々が、ムラの空間的領域とそれに根ざした集団から離脱していく」[安井　二〇〇二　一三九～一四〇]としている。すなわち、ムラ社会の崩壊の中で、ムラの空間的領域を現在から論じることは難しくなっている。あるいは、論じたところで実態に則さない部分的な切り取りに過ぎないのも、周知の

ことであろう。しかし、そこに集落があり、人が生活する以上、そこが生活の基盤であることには変わりなく、ムラを出入りすることは多い。したがって、空間的な把握や認識も、外へ向かう傾向が強くなる。空間認識も当然、ムラの外へと向かうことになろう。

伝説は「編集」され、常にその語り手による解釈が加えられている。柳田以来の議論であり、前提条件である。ならば、その伝説が誰によって、どのように語られ、またどのように空間に結びつけられているのかも、語られた伝説をみることによって、空間認識の一端は明らかになってくる。

ここでもう一つ事例をあげる。先に述べたように「八枚なべら」の伝説の中では、女性、竜、白蛇が樫ノ休場という峠を越えて讃岐に向かう。その向かった先は、塩入、満濃池などの地名が登場してくる。その塩入においても蛇の伝説を確認できるので、事例を一つ取り上げよう。

事例七　塩入地区・男性・昭和二年生まれ

塩入地区のはずれ、山手の方には釜ヶ淵という淵があって、そこには竜だか蛇だかが棲む。カネを嫌い、鎌をその釜ヶ淵に投げ込んだら怒って夕立を降らせ、洪水にした。釜ヶ淵には水神が祀られ、祭りも行われるが、塩入では祭りの際には鉦を使わない。

塩入における事例も、太刀野山各地区同様に多様である。ただ問題なのは、事例七にはすでに太刀野山との関係性は、どこにも見あたらないという点である。もちろん、話し手自身は「八枚なべら」で伝説が存在することは認識している。だが、それとは別に塩入独自の伝説をもつ。伝説の存在としても、「八枚なべら」からやってきた女性、竜はここで突如姿を消すことになる。伝説としては無関係である。

実際、そのような伝説の話し手は、日常生活の中では頻繁に樫ノ休場を越えて阿波方面へ抜ける必要はなかった。伝説はムラの中で完結する。とすると、金毘羅街道は讃岐へ抜ける太刀野山側のベクトルが讃岐に向い、一方の塩入側からは外に向かわないことになる[21]。

金毘羅街道を通り抜けた人の動きは、ムラの領域を越えた空間移動でもあり、生業活動の一つであった。話し手が、実際に体験してきた交通・交易関係に裏付けられ、結果、伝説が「編集」されていく。そういった意味でも、空間認識は相対的なものになる。事例七では塩入地区での認識の一例を、また事例二においても大平地区では「八枚なべら」の伝説については知られてはいないため、事例からは相関関係を見出すことはできない。

五　おわりに

三野町太刀野山を中心にして、とくに「八枚なべら」に関する蛇伝説をめぐって、空間認識の相対性と多様性について検討してきた。ここで整理すると、中屋の領域内にある「八枚なべら」は、金毘羅街道沿いに中屋、井ノ久保という二つのムラで、伝説において共通性を確認できる。これに対し、この交通・交易関係から外れた大平や馬瓶、土釜などでは「八枚なべら」に関しての詳細は認知されず、また、阿波方面から入ってくるばかりの、一方向的な交易関係が成立していた塩入に関しても、同じく「八枚なべら」と結びついた伝説について知られていなかった。

つまり、空間への認識においては、常に相対的であるということになる。そして、その空間認識の基盤となるのが道という、ムラの領域を跨ぎ、結んでいく、公的な空間ということになる。その場合、現状では井ノ久保、

中屋が、事例の伝説においては話型が多様ではあるものの、取り上げられる空間としては、共通点がある[22]。すなわち、伝説の中でも、登場する女性なり竜なりが、金毘羅街道に沿って移動する。このことは、共通した空間認識を示していて、一つの伝説支持集団を浮き彫りにしている。伝説という一面においては、共通点としての空間認識も導き出すことができるのである。

図らずも、その認識としての共通性、類似性は、「ムラの空間的領域とそれに根ざした集団から離脱していく」[23]、という指摘の傍ら、空間認識のレベルでは依然、少なくとも、伝説から見る限り、ムラの枠は越えるものの、空間認識を共有するという、相反する結論に辿り着いた。もちろん、ムラ社会における空間認識を、伝説においてすべて明らかに出来たとは思わない[24]。しかし、一つの伝説という民俗事象を通じて、生活の場であり、歴史的にムラの領域でもある空間領域と、現在の生活者のもつ空間認識には一定のズレが生じているという点では、さらなる検討の可能性を見出すことができよう。

注

(1) 福田アジオほか編　二〇〇〇　『日本民俗大辞典』　吉川弘文館のなかで、花部英雄「伝説」は、柳田國男の『伝説』からこの三点を引用して伝説を捉える上で便利な指標とする。

(2) たとえば『阿州奇事雑話』などがある。新編阿波叢書編集委員会編　一九七六『新編阿波叢書』歴史図書社にも収録されるが、『新編阿波叢書』によると、その成立は寛政年間と想定されている。

(3) 少なくとも、徳島県内での各市町村史においては、すべてこうした記述方法が採用されている。

(4) 梅野光興「解釈の技法・記憶の技法―高知県大豊町の蛇淵伝説」（小松和彦編　二〇〇〇　『記憶する民俗社会』　人文書院　所収）による用語説明については、「伝承と伝承を接合していく動きのことを『編集』と呼んでみたい。」［梅野　二〇〇〇　二一八］とする。

(5) たとえば、それはムラであったり、またムラの中の一部の人であったり、街道沿いやある川の流域沿いだったりと広域に及ぶケースも想定できる。また、極端な例として、特定の年齢集団や片方の性別のみを支持集団とすることもありうる。

(6) 一般的な意味で使用する。何度も繰り返し述べられてきたことであろうが、「ムラ」は近世の藩政村や明治以降の町村合併によって成立した村とは異なり、いわゆる鈴木栄太郎のいう「自然村」を下敷きにした概念で、集落、耕地、山野等の空間的広がりをもつ社会組織とされる。

(7) 前掲柳田國男「伝説」の中での三つの指標の内の一つ。

(8) 三野町誌編集委員会編　一九七四　『三野町誌』

(9) 『三野町誌』六一頁。

(10) 『三野町誌』二四二頁。

(11) 『三野町誌』二六一頁。

(12) 中略部分は、大石小石がごろごろ転がっていたが、転がり、水に浸食されてアバタ面が平らにならされたという説明が書かれる。

(13) 中略部分は、「ふち」の下流に土山が隆起したが、天保期の大水の際に崩れ、鉄砲水となって下流を襲ったという洪水の伝説が書かれる。

(14) 中略部分には、天保年間の大水の際、崩れた土砂によって淵が埋まったと記述される。

(15) 案内板の製作責任者は「三野町　つくし会二一」と記されるが、この会は地域興しを目的にして中屋出身の町会議委員を中心にして組織され、活動する。

(16) 梅野前掲論文。

(17) 上流から長渕、中淵、釜淵が三つ連なるが、「竜王大権現」が祀られていたのは一番下流の釜淵である。現在はこの淵からご神体が遷され、この場所にはない。

(18) 前掲柳田の三つの指標に照らし合わせた。

(19) ここでいう金毘羅街道は、中屋とから発し、井ノ久保を通過し、樫ノ休場という峠を越えて讃岐の琴平方面へといたる道であり、常夜灯が設置され、かつて節分の日の夜には金毘羅山に参る人のために、ムラの人の手で一晩中灯がともされていたという。

(20) 当然のことながら、中屋、井ノ久保には「八枚なべら」へ行ったことがない、とか伝説の詳細を知らないとかいう人もいる。ただ、ここではほかの地区に伝説の詳細を知る人がいない、もしくは、聞いたこともないとする点に、ここでは着目した。

(21) 伝説という事例を通していえることであり、ムラにおける空間認識はもっと多様であり、単純には判断できないが、その中の一要素として理解することができる。この伝説を事例とした場合、空間認識と、かつての話し手の交易関係が重なってくる。

(22) この共通点は、地元の「つくし会」や三野町を中心とした「八枚なべら」の観光地化へ向けた最近の整備事業による影響も考えられる。

(23) 前掲安井論文。

(24) たとえば、市川秀之は「山間盆地村落の空間構成」の中で、村落空間を「機能空間」「社会空間」「認識空間」に、それぞれの局面に応じて三分類する。すなわち、多様な局面で空間は展開することは自明のことであり、一要素のみですべてを明らかにできないのは当然のことである。ちなみに、市川のいう「認識空間」に関しては、村落内での「宗教的あるいは精神的な面の投影として」[市川　二〇〇一　三五六]定義するため、また、ムラの外に向かっての認識は対象圏外になっている。

参考文献

市川秀之　二〇〇一　『広場と村落空間の民俗学』　岩田書院

梅野光興　二〇〇〇　「解釈の技法・記憶の技法―高知県大豊町の蛇渕伝説」　小松和彦編『記憶する民俗社会』　人文書院

安井眞奈美　二〇〇二　「村（ムラ）」　小松和彦・関一敏編『新しい民俗学へ』　せりか書房

武田明編　一九七二　『四国路の伝説』　第一法規

武田明・守川慎一郎編　一九七七　『日本の伝説一六　阿波の伝説』　角川書店

福田晃編　一九八二　『日本伝説大系一二』　みずうみ書房

福田晃　一九八二　「伝説の分類と定義」　『歴史公論』八―七　雄山閣出版

福田アジオ　一九八四　『日本村落の民俗的構造』　弘文堂

福田アジオ　一九九〇　『可能性としてのムラ社会』　青弓社

常光徹　一九九九　「伝説と昔話―伝説の三つの特徴」　小松和彦・野本寛一編『講座日本の民俗学八　芸術と娯楽の民俗』　雄山閣出版

三野町誌編集委員会編　一九七四　『三野町誌』　三野町

三宅精一　一九九八　『わが祖　わが村』　私家版
柳田國男　一九九〇　「伝説のこと」　『柳田國男全集七』　ちくま文庫版（初出は一九二五年三月に柳田國男監修『日本伝説名彙』日本放送出版に掲載された）
柳田國男　一九九〇　「伝説」　『柳田國男全集七』　ちくま文庫版（初出は一九四〇年九月に岩波新書として刊行されたもので、一九三八年の「日本民俗学講座」で六七回続けて講義した内容をまとめたものである）

（〒七七〇―八〇七〇　徳島市八万町向寺山　徳島県立博物館）